
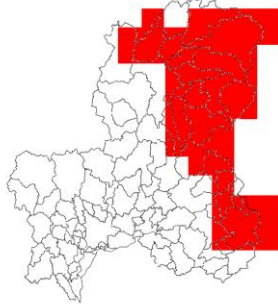


クロイチゴ	<i>Rubus mesogaesus</i> Focke	準絶滅危惧
		バラ科
選定理由	県内では産地がある程度限られるやや稀な植物で、一箇所の生育地での消滅が県内個体の絶滅にすぐ直結することはないが、生育地の消滅が継続的に起これば、県内個体の絶滅につながるため。	写真(高野裕行) 
形態の特徴	平伏する落葉低木。茎は軟毛か綿毛がある。刺はやや堅い。葉は三出で下面に白綿毛があり、頂小葉は大きく卵形-円形、重鋸歯状欠刻鋸歯縁、急鋭尖頭、側小葉は傾倒卵形。二出集散花序-散形花序に6月、径0.5cmの5-15花を着ける。小花柄は白軟毛密生。萼片は広披針形。花弁は紅紫色、さじ形、直立する。雄蕊約25。雌蕊20-30。果托は卵球形。果実は球形、黒紫色。	
生態的特徴	山地、亜高山の林縁や林内に生える。	
分布状況	南千島、北海道、本州、四国、九州に分布(北海道以外ではやや稀)。千島(国後島)、台湾、中国西部・中部、ヒマラヤ(ネパール、ブータン)。県内では県北や県南東部の山地の林縁や明るい林内にやや稀。	
減少要因	山林管理の停滞に起因する林縁の樹林化、林冠の鬱閉化のため生じる日照不足からの生育不良。	
保全対策	山林管理の促進による林縁の低~中茎草地の維持、林床の日照確保。	
特記事項	ブナ帯上部(標高約1,000~1,500m)に生育する。同所的に生えるエビガライチゴ(ウラジロイチゴ) <i>Rubus phoenicolasius</i> Maxim. やエゾキイチゴ <i>Rubus idaeus</i> L. と似ている。頂小葉が側小葉より特に大きく、果実が赤熟でなく黒熟する点で区別できる。	
参考文献	Flora of Japan. Volume II b. Angiospermae Dicotyledoneae Archichlamydeae(b). 2001. KODANSHA. Edited by Kunio Iwatsuki David E. Buufford and Hideaki Ohba. Rosaceae 23. <i>Rubus</i> L. N. Naruhashi	

文責: 高野裕行